林泰輔と日本漢學

町田三郎

一

大正十一年に没した林泰輔の遺稿集ともいうべき『支那上代之研究』（昭和二年 進光社）の巻末に年譜が付されている。略歴は次の如くである。

安政元（一八五四）年九月二十六日　千葉縣香取郡常盤村（現多古町）に生る。

明治初年ころ　郷里の人並木栗水の門に入り漢學を修む。

十六年九月　東京大學古典講習科漢書課に入學。

十九年十一月　東京大學より中學校用漢文教科書編纂を命ぜらる。

二十年七月　東京大學古典講習科漢書課卒業。

二十一年一月　第一高等中學校の國語漢文の授業を囑托。

二十二年九月　山口高等中學校の教務を囑托、翌年助教授。

二十五年十二月　『朝鮮史』（五巻）上梓。

二十八年七月　疾病のため退職。

二十九年六月　東京帝國大學文科大學助教授。

三十年十一月　疾病のため退職。

三十二年四月　東京高等師範學校講師。

三十四年六月　『朝鮮近世史』（二巻）上梓。

三十五年四月　文部省國語調査委員會補助委員及國語教科書編纂委員。

四十一年五月　『漢字要覧』（一巻）上梓。

四十一年九月　東京高等師範學校教授。
大正元年八月　『朝鮮通史』（一巻）上梓。
　三年七月　『上代漢字の研究』により文學博士。
　三年九月　『四書現存書目』（一巻）上梓。
　四年九月　『周公と其時代』（一巻）上梓、翌年この書により帝國學士院恩賜賞。
　五年十一月　『論語年譜』（二巻）上梓。
　七年六月　教員檢定委員會委員。
　十年七月　『龜甲獸骨文字』（二巻）上梓。
　十一年四月七日　卒　鄕里常盤村先人の墓側に葬る。後染井墓地に分骨埋葬。

井上哲次郎は『支那上代之研究』に序文を寄せて次のようにいう。

明治維新以來の漢學の趨勢を回顧して見るに、安井息軒、鷲津毅堂、岡松甕谷、根本通明、重野成齋、中村敬宇、嶋田篁村、竹添井井等次第に凋落して其命脈も漸く絶えようとする時に方って、其閒を彌縫して起って來た者は、主として大學の古典科出身者であった。其中に於て文學博士林泰輔君の如きは最も有力なる一人であった……。

さらに古典講習科の同學岡田正之も同書の序にかれの學問の推移展開をこう述べる。

顧うに世の經學者は訓詁の學に精しきものは、性理の義に疏く、性理の義に明なるものは攷證の法に乏しく、各々一方に偏するを免れず。然るに博士の學は全く三者を該ね、加うるに史學を以てしたるなり。語を換えていえば、經と史とを經緯して成れる一大經學なり。試みに研鑽の逕路に就いて之を觀るに、凡そ四變あり。初め鄕里に在るや、程朱の學を宗として性理の義に通ぜしが、古典科に入るに及び、專ら攷證の風に嚮う。之を第一變とす。古典畢業の後、育英の餘閒を以て韓史を綜覽し、廣く資料を輯め、遠く遺跡を探り、遂に朝鮮史を著わせり。之を第二變となす。其後詩書を究め、小學に及ぼし、三代の制度文物を覃思し、遂に「上代文字の研究」及び「周公と其時代」等の著作あり。之を第三變となす。晩年吉金貞石の文を商榷し、龜甲獸骨の字を攻究し、遂に金石甲骨に關する諸著あり。之を第四變とす……。博士の學は愈々變じて愈々深く、愈々深くして愈々精し……。朝鮮史の如きは、本邦學者の編纂としては博士を以て權輿となすべく、周官の造詣は淸朝の攷證學者もはるかに及ばざる所あり。龜甲獸骨の研鑽に至りては、出土後幾ばくならずして、釋文の

端緒を開きしは博士を嚆矢となさざるべからず……。

さらに語をついで岡田正之は博士の死を悼みつつ何とも残念でたまらぬこと二項をいう。

博士の著述頗る多く、未だ藁を脱せざるも尠からず。余は特に其の志を齎して空しく逝きしを惜むもの二あり。晩年再び禹城に赴きて、殷墟を訪い、親しく甲骨出土の跡を踏査せんとし、旅装も既に成りしが、河北安陽地方に土匪の起りしを以て、行期を延ばし、遂に其の事を果せずして没せり。是れ大に惜むべきことの一なり。又久しく本朝の經解子解を編する志を抱き、多年我先儒の經子を解釋せる書を採蒐して至らざるなく經書の部のみにても六百九十部千九百餘册の多きによれり。然るに一部の書として刋行を見るに到らざりしことは、大に惜むべきことの二なり。嗚呼博士に假すに數年を以てして、此等の志業を遂げしめば、其の學界に裨補するものは、更に一段の多大なるものあらんことは必すべし。噫。

すなわち林泰輔は、若き日鄕黨の朱子學者並木栗水に程朱の學を學び、古典講習科に入學しては嶋田篁村らから清朝風の攷證學の手ほどきをうけ、しかもその後は教鞭の傍ら朝鮮史や中國古代史研究へと進んで『周公と其時代』といった名著を殘した。ただかれは身體が弱くそれによって何度か職を變えていること畧歴に見る通りである。そして友人の岡田がもっとも遺憾とすることは、安陽の殷墟あとの調査に赴けなかったことと、多年日本漢學に志を抱いて經子に關する先儒の著作を多數蒐集しながらついにその論攷を一本にまとめえなかったことだという。

二

東京大學は明治十年に開設され、文科大學中に和漢文學科も設置されていたが、何分にも十六年まで講義はすべて英語によって行われ、十分な語學力を體していなくては講義について行くことも出來なかった。講義も英獨の語學中心で、和漢の學は逼促狀態であった。また早くから英語を修得する機會も多く、新しい學制に馴染みやすい都会育ちの若者でなければ、東京大學は受験することすら難しかった。まして田舎育ちの漢學書生にとっては、大學は無縁の存在であった。

明治十四・五年頃から和漢學に對する後繼者の不足、したがってその養成の急務が說かれはじめた。やがて時の東大總理加藤弘之らの建議が認められ、文學部に附屬して國學を内容とする「古典講習科」(甲部)が十五年に新設された。ついで漢文學を專攻する「支那古典講習科」(乙部)が設置され

た。これを「古典講習科前期」といい、翌十六年、名稱をそれぞれ「國書課」「漢書課」と改めた。これを「古典講習科後期」と呼ぶ。

「古典講習科」（乙部）の規程の第四條に「該部ニ入ルヘキモノハ二十年以上三十年以下トス」とある。入學者を二十代の青年に限定したわけである。しかしこの規程はあまり嚴格には運用されなかった。たとえばこの時の入學者である西村天囚は當時數えで十九歳、また名取弘三は四十を過ぎていた。たまたま林泰輔は滿三十歳であった。

入學を許可するもの四十名、うち官費生十五名。志願者は百六十名、四倍の競爭であった。地方の漢學書生にとっては、またとない大學入學のチャンスであった。

元來古典講習科の運營費は、大學の通常經費とは別枠で要求したものであったが、これが認められず學內經費で支辨することとなり、當初から財政的に維持の難しいものであった。世間一般も再び洋學尊重の氣風に急傾斜していった。こうした狀況の中で大學當局は、十八年に至り講習科生徒の募集を停止した。結局「古典講習科」は二十年と二十一年の二回卒業生を送り出すに止まった。前期の乙部の卒業生二十八名、後期十六名。學士の稱號は與えられなかった。

前期の卒業生の主なものに、市村瓚次郎、林泰輔、岡田正之、花輪時之輔、瀧川龜太郎、名取弘三、日置政太郎らがい、後期に嶋田鈞一、山田準、兒嶋獻吉郎、長尾愼太郎、黑木安雄、萱沼貞風らがいる。中退に西村天囚、萩野由之がい、鄰接の國書課に落合直文、小中村義象、安井小太郎がいる。すばらしい顏ぶれである。

酒は飮まず、烟草は吸わず、碁も打たず、將棋もささず、書畫骨董も好む所なく、學校の講席に臨む外は、終日端坐して机に對い、書を讀み筆を執りて餘念なかりしは、亡友林浩卿博士の日々の生活なり。

右は古典講習科同學の瀧川龜太郎の描く講習科時代の林泰輔のプロフィールである。瀧川はさらに續ける。

博士が大學漢學科に入りしは明治十六年九月なり。余も亦幸にその後に列り、共に一槗寄宿舍第八號室に書籍机案と頓住せり。年齡余より長ずること八九歲、その敎室に出でて書を講ずるを聞くに、音吐朗朗解釋明晰、遙に等濟に超越し、既に大家の規模を具せり。如何なる多忙多事の時と雖も學課の豫習を怠らず、試驗前復習の時に至れば敎科書を取りて卷初より卷末に至るまで悉く之を讀み、一字一句も省畧せず、尙お時日あれば再三之れを反復すること初の如し……。(1)

几帳面でまじめ一點張りの若き林泰輔を紹介したあと、瀧川はこの謹勉實直な博士の學問的成果を集約して次のように評價する。

第一は朝鮮史の研究。本邦の率先たる者である。第二はわが國の漢學者たちの秀れた經解の蒐集。中井履軒や龜井昭陽等の未刊稿本の蒐集。第三は諸子考。經史とともに重視すべしとの主張。第四は唐虞三代文獻考の著作。甲骨金石文の集約的成果で『周公と其時代』はその成果の一部である。(2)

瀧川の林評、至當公正の見といってよい。今日林泰輔の名は、甲骨研究でのみ記憶されるが、たとえば瀧川の指摘する第二の日本漢學への着目、先儒の著作類の厖大な蒐集は、先きの岡田正之の指摘とともに注目され、正しくこの道の先驅として評價されねばならない。

三

林泰輔は藏書家であった。明治三十六年、かれは鄕土の青年たちの向上を願って常盤村の自邸内に杜城圖書館と名づけた私立圖書館を創立し公開した。和漢書一〇、二三〇冊、洋書三五〇冊、その他一六、〇〇〇餘冊で郡內圖書館の嚆矢であり、設備も整っていた。(3) 大正十一年の逝去後、杜城圖書館は解散となり、その藏書のうちの五、〇〇〇冊が大正十四年に千葉縣立圖書館に寄贈され「林泰輔紀念文庫」として保存された。これより早く沒後まもなくの大正十一年十二月かれの藏書のうち主として日本漢學に關する六九一部が嗣子林直敬によって東京高等師範附屬圖書館(現筑波大學中央圖書館)に寄贈され、林文庫として收藏された。

現在千葉縣立圖書館所藏の書籍は、その『漢籍目錄』によると、ひとまとまりの紀念文庫は解體され、「杜城」のラベルで他の書籍の中に分散配架されている。書籍の內容は、たとえば山﨑嘉『文會筆錄』二十卷、中村之欽『近思錄示蒙句解』十四卷、並木正韶『宋學源流質疑』一冊、『李退溪先生西銘考證講義』一卷といったもので比較的一般的なものが多い。

これに對して筑波大學中央圖書館の書籍は、受贈冊數六五一部一九〇三冊は四書を主とした漢籍類で、原典は殆んどなく多くわが國で書寫刋行されたものである。大學・中庸關係書が一一〇部、考經が七〇部、論語が八十部、四書が二十二部、その他易經から諸子に至る刋本、寫本類で、中には謄寫版による龜井昭陽『莊子瑣說』も含まれている。日本漢學の寶庫といってよい。

とりわけ論語關係書の蒐集にきわだって力を注いだもので、ここに貴重な書籍が多い。第一に擧ぐべきものは、元龜寫本『論語集注』である。この書は學而・爲政の二篇のみの「卷一、丁數二七」であるが、卷末に「于時元龜四年癸酉三月十三日書之春永筆　新註論語全部一筆」とあり、そこに付箋があって林泰輔本人の筆がきで次のように記されている。

此書は伊地知季安の漢學紀源卷二に、余從兄本田親標嘗得論語集注一本則卷之三而尾記「元龜四年四月春永書新註論語全部一筆」とあると同種にて卽ちその第一卷なり。

德川時代以前に於ける論語の古鈔本の存するものは皆何晏集解本のみに限られて朱子集註本は殆んど之なしと言ふて可なり。さればこの書は希覯の珍本たることは勿論なれども又四書訓點上の問題を研究するにも極めて必要なるものといふべし。

大正九年四月三十日識　　進齋

この元龜四（一五七三）年本の集註については、やがて「斯文」第三編第一號に「元龜鈔本論語集註に就て」を發表して、右の付箋の說を補いかつ展開して、筆者の春永や訓點上の問題に說き及んでいる。

はじめに『漢學紀源』の書き入れの末尾「新註論語全部一筆」のあとになお「旣有和點、且採曹端詳說、閒注傍注」とあることを補っていう。筆者の春永は如何なる人か不明。ある人は春永は近江の人源永春の誤寫ではないかというが、年代が元龜の時代とは餘りにも違い過ぎて永春說は採れない。

書き入れの「詳說」というのは明の曹端の『四書詳說』のことで、桂庵が明に學んでいた折り書き入れたものであろう。とすれば、この書は桂庵が岐陽和尚の和點を修正し且つ書き入れした本を寫したものと思われる。しかし桂庵の沒したのは永正五年で元龜四年より六十六年以前のことなので、筆者の春永は桂庵門下というよりはその再傳の弟子というべきであろう。

元龜四年のさい、文之は十九、如竹は四歲である。いわばこの書は桂庵の傳えた唯一の訓點本で文之點論語の藍本だと思われる。そして內容を檢すると、學而篇の「賢賢易色」に訓點して「賢（トシテ）レ賢（ヲ）易（カエヨ）レ色（ニ）」と「賢賢」は朱註に從って讀み、舊點の「カシコキヨリカシコカラントナラバ」を改めるが、「易色」の二字は「色ヲ易エヨ」と舊點に從っている。こうした點から朱子學がまだ十分に行きわたらない時代の狀況がここからも窺えるわけである。

この希覯の珍本たる元龜鈔本論語集註第一卷をおおよそこ

のように紹介して、筆者の春永を桂庵再傳の弟子にしてしかも桂庵の傳えた唯一の訓點本がこれだと捉え、またこの書の訓點の仕方から朱子學が十分に行きわたらない時代の状況を反映していると論じ、最後に『漢學紀源』の著者も實見することのなかった第一巻の鈔本を偶然にも入手しえた喜びを「眞に大幸といふべし」と結んでいる。

なお今日春永の同じ識語をもつ巻二と巻十が「青淵論語文庫」に存し、その巻十の巻尾には「元龜四年十月二十六日全册書寫」と記されている。つまり全册が元龜四年三月から十月にかけて筆寫されたわけである。

林文庫の尤物として第二に指を屈すべきは、多數の鈔ものの存在である。鎌倉から室町、江戸の初期にかけて鈔（抄）もの、いわゆる當時の口語譯が多く傳えられるが、林文庫に所藏する「論語抄」の主なものは次の如くである。

① 〔室町末期近世初期〕寫　存巻七—一〇、二册　經文には訓點を付す。巻末識語の末尾「文明七乙未仲冬上浣題」とあり、改行して「可耻々々、沒蹤跡處」とある。この八文字は他の文明本にはない。

② 〔室町末期〕寫　存巻七・八　一册　題簽「論語抄」朱點朱引を施す。

③ 〔室町末期〕寫　存巻一〇　一册　現在の表紙は後につけたもので中央に「論語抄」とある。原表紙となる初葉には論語「自十九　廿終」と墨書、朱點朱引を付す。文明七年の識語なし、蟲喰いのあと多し。

④ 〔室町中期〕寫　一〇巻五册　集解本　巻末に「堺浦道祐居士重新命工鏤梓　正平甲辰五月吉日謹誌」の識語。いわゆる正平版論語單跋本の寫本である。題簽「魯論」巻一—三は訓點のみ。巻四から訓點朱點朱引を施す。藏書印記に「圓融藏」「盛胤之印」とある。すなわち天臺宗圓融院の梶井宮盛胤法親王（一六五一〜一六八〇）の所藏本ということである。[4]

⑤ 〔元和中〕刊　古活字版　集解本二〇巻九册（第一〇册欠）經注文に訓點、全巻に朱點朱引がある。第一册に「船橋藏書」の印記がある。「船橋」とあるのは清原秀賢のとき船橋氏を稱した。船橋家も代々儒道を家業とし、明經博士として歴代天皇の侍讀をつとめる家柄であった。[5]

この「論語抄」に關して林泰輔は、『論語年譜』寛永元年の條の傳述の部に、

清原家論語抄二十巻を撰し活字を以て刊行す。

此の書は本文と集解とを載せ、次に解釋を錄せしものな

り。その清家より出でたることは明かなれども、何人の手に成りしか詳ならず。されども論語抄の中に於て最も完備せしものの如くなれば、清家中にありても特に學識ありしものの作なるべし。宣賢は嚮に他人の講義を聽書して論語聽塵の作ありしが、或は又自ら己れの説を記してこの抄を撰せしには非ざるかとも思はるるなり。(6)

この元和古活字本の集解は保存もよくきわめて讀み易い。「論語抄の中に於て最も完備」したとされる右書の冒頭の部分を次に掲げておこう。

論語學而第一　　凡十六章

何晏集解

學而第一論語ト何晏――(ママ)トノ四字ヲハ讀マイソ本注ノ唐本ニハ學而第一ト計リ有テ論語ノ字ヲノセス其ヨリロニ論語巻之一ト有ソ何晏――(ママ)ノ四字ハ無ソ新注ノ唐本ニハ論語巻之一ト在テ其次ノクタリニ學而第一ト在リ故ニ不讀　皇侃ノ疏ニモ論語ノ二字ハ無ソ學而一番ニ置事降聖以下皆須學成故ニ學記云玉不琢不成器人不學不知道是明人必須學乃成此書既遍該二衆典一以教二一切一故以二學而一爲先也天自レ降二聖人一學レ文ヲ本ニサスルソ諸事學ヨリ成ル者ソ　第ハ審諦也一ハ數之始也既諦定二篇次一以二學而一居レ首故也又第ハ次第也齊論ニハ時習ト置ソ

また學而篇第二章「孝弟者其爲仁之本與」は次の如く抄出する。

結前ヲノ語也所詮君子ハ孝弟ヲ本ニスヘキコトソ孝弟ヲ行ヘハ其マヽニ仁道ソ孝弟ハ我一家ノ中ニテ行フソ其心ヲ押廣メテ天下ノ民ヲ惠ンテ仁道ヲ施スソ仁ハ五常ノ始也故ニ仁ヲ一ツ云ヘハ四徳ハコモルソ推愛及物曰仁注ニ大成トハ孝弟カ人ノ根本也根本タニモ立テハ枝葉ハ自成物也如其仁義孝弟タニ立テ行ケハ衆藝カ大成リ行物也論語一部ノ中皆仁ヲ説ソ顏回カ克己復禮爲仁ト云モ曾子カ一貫ノ忠恕モ皆仁ノ道ソ南軒張氏ハ論語ノ中ノ仁ヲ說ク處ヲ類聚シテ一編トナシ洙泗言仁錄ト號スルソ仁ヲ干要トスル故也

朱子の新註本のわが國への傳來は、鎌倉時代に入宋游元の學問僧や貿易に從事するものによって持ち來らされた。十四―五世紀になると天皇を中心とした宮廷貴族や京都五山の僧侶等の間で、新知識としての新註による解釋や論議が活潑になっていった。たとえば天臺僧の獨清軒玄惠などは當代新註學の權威で後醍醐天皇の侍讀もつとめ、貴族や僧侶の間で强い影響力を誇っていた。

かくして堂上權貴の人々や學僧らに受容された新註は、ここに至って俄然一般人士にも受け容れられ公然と研究されるようになった。元來清原・大江などの明經家は「五經」にのみ家點があってそれが祕傳とされていた。しかし四書に關しては家點も口傳もなかった。新註『論語』の研究は、この面で明經家から制約をうけることはなかった。そこでむしろこうした狀況に一驚したのは明經家であった。かくしてかれらは「新註」併取、また四書に家點をつけこれを祕傳化することに懸命であった。

船橋家の『論語抄』も清原家系統の抄ものであったが、ここではこの書を祕傳とはいわない。ところが林文庫の№四三二に「論語集解講義」なる書があり、開卷冒頭に「寛保元辛酉年八月二日開口」とあって清原家の講義書である。そして第一巻の見返りに「誓約」が記されている。このことはつとに林泰輔も注目して「論語に就いて」の論考の中でおおよそ次のように論じている。

この誓約は、藤原實連という人が清原親賢に入門しその際「誓約」として提出したものである。内容は、此の度入門して論語の講義を伺う以上は決して師匠の説には背かぬ。師匠の恩は永久に忘れぬ。論語を解釋するのに他人の説や新註新説を雜えない。許可なくして論語を他人に傳えぬ、ということが書いてある。非常に嚴格なものである。そして最後に右の通り師門の掟には從い、もし異心違背の場合には「永可蒙天罰者也」と結んでいる。

師弟の絆の固いのは結構であるが、この書の日付、寛保辛酉の年といえば一七四一年、すでに荻生徂徠沒して十數年、吉宗の最晩年のことである。學問が事實上世間一般に解放されて最も自由に論議しうる時代に、博士家は依然として舊態そのままの固陋さを曳きずっていたわけである。

四

林泰輔の日本漢學にかかわる論考はいたって少い。『論語年譜』（大正五年十一月）とその『附錄』（同年）及び稿本『論語源流』（昭和四十五年影印）は内容的に一部日本にかかわる。論文としてはわずかに『論語に就て』（漢文學會會報第18號大正六年九月）「我邦に於ける論語の實行と研究」（斯文第三編第一號大正十年二月）「元龜鈔本論語集註に就て」（同上）があるばかりである。しかし以上の書籍・論文によってもかれの關心の軸が「論語」であったことは知られる。さて『論語年譜』の阪谷芳郎の序によると、この書は青淵

澁澤榮一翁の七十七回の誕生日を祝して獻呈するために編纂されたもので、その任に當ったものは三上秀次、萩野由之、林泰輔の三氏であった、という。ただ實際の業務は林泰輔が行ったものである。

『論語年譜』の目次は、

巻上
　序説
　一孔子の畧傳
　二論語の編纂
　三周代に於ける論語の影響
　四漢代以後東西諸國に於ける論語流行の概觀
　本編
　年譜
巻下
　附錄

の形式で、上下一册づつである。記述の中心は「年譜」で、例言によれば「史實、傳述、鈔寫、刋刻」の四項で説かれ、「史實は論語に關係する事實の歴史傳記等に見えるものを載錄し、傳述は論語に就て解釋若しくは評論して述作せしものを載錄す。鈔寫・刋刻は時に傳述の中に附載せしもの多し」とある。例を擧げておこう。

後醍醐天皇元應元　元仁宗延祐六　西紀一三一九
日本
史實　閏七月二十二日、日野資朝、僧玄慧等と宮中に於て論語を談ず。花園上皇之を聞き、玄慧の談義は誠に達道にして其の餘の人々も悉く理致に叶ふと宣へり。（花園院御記）藤原俊光、後醍醐天皇に代りて、伏見天皇第三回供養如法經を奉る願文を草す。文中「昔髙宗之喪太宗也、竭三年不言之孝行」とあり。論語に據れるなるべし。（願文集）

また

後醍醐天皇元亨三　元英宗至治三　西紀一三二三
日本
史實　朝臣多く論・孟・大學・中庸に依りて義を立て、近日風體理學を以て先とするの傾向あり。（花園院御記）以て朱熹四書集註の漸く朝臣の間に行はれたるを徵するに足れり。されば四書集註の我が邦に傳來せしは、蓋し是より數年以前にあるべし。
支那
史實　泰定帝位に卽くや、十一月使を遣はして曲阜に至らしめ、太牢を以て孔子を祀らしむ。（元史泰定帝本紀）

これらの例に見るように典據を明示しつつ、時に己れの見解をも雜えて、前漢の高祖五年BC二〇二年から大正四年一九一五年までを年次を逐って日本、中國、朝鮮等々の先きの四項を記錄するのである。大事業であったが、一年足らずの間で完成したという。驚くべき迅速さであるが、平素の努力蓄積あってのことである。

たとえば後陽成天皇慶長七年の條の鈔寫の項に、釋幻桃魯論素本十卷一册を鈔寫す。此の書は東京帝國大學圖書館の所藏なり、と述べたあと「今、編者の眼に觸れたるもの（鈔本）を擧ぐれば左の如し」といって、「論語集解題簽圓珠經十卷五册八行十六字本　宮內省圖書寮所藏」以下各所に點存する四十二點を記錄する。短時日で出來ることではない。(7)

そして上卷において論じられた論語の諸本、たとえば漢石經の拓本、宋版論語注疏、舊鈔本論語集註、正平版論語集解、天文版論語集解等々のかんたんな解題及び寫眞が下卷であり、『論語年譜附錄』である。

『論語年譜』刋行の翌六年、林は「論語に就て」の論文を發表する。要旨は中國における論語の受容と展開を王朝を目やすに說き、次いでわが國に及び、さらに東西諸國における論語注釋書類の概數をみ、最後にわが國に傳わる古版本や鈔本の價値を說いて一篇を終る。

この論文の中で幾つか注意すべき論點がある。まず唐代の學問についての見解である。かれはいう。

論語流行の形勢としてはその初めから明淸に至るまで歷代とも盛行し、從って解釋書注釋書も多く出來ているが、その二千數百年間において獨り唐三百年間だけは大いに他の時代と異っている。學問が盛んであったわりには論語の解釋書がきわめて少い。唐書藝文志その他を檢しても僅に十四五種に過ぎない。なぜそうなのか。唐初に官撰の五經正義ができ、唐代の學者は五經は五經正義さえ讀めば好い事になっていた。論語にはそうしたものはないが、一般に唐代の人は經書の解釋は餘り熱心に行はない。論語に就いてもそう深く硏究穿鑿することはなかった。また制度的にも論語と孝經は必ず兼通する定めで、ごく卑近なものとして子供の讀みものと見做していた。從って論語は幼學者の讀物で學者は餘り硏究しなかったわけで、これは中國歷代の中で餘程特殊の現象である。

しかも日本で中國の文物が盛んに舶來した時代は遣唐使や留學生が往來した奈良平安朝であるが、それは丁度中國では論語の甚だ尊ばれなかった唐代に當っている。そこで留學生

が歸國後中國の文明をしきりに皷吹しても、論語がとくに尊重された風はないのである、と。

次に、淸朝は學問が盛んで論語の注釋書は非常に多い。いわゆる考證學の時代でその解釋は従前とは大分異っていい、論語を古典として研究する態度であった。この點は確に一歩を進めている。しかし論語を實行するという點においては遠く宋代に及ばない。つまり論語の精神が歴史の事實の中に反映することときわめて乏しいのである。

また鎌倉から德川初中期まで流行した論語抄の意義についていう。いわゆる假名書きの口語譯である抄ものが、學問の普及に力があったことは何人も否定できぬところであるが同時に日本人らしい特別な見解のここに記されていることにも注意を拂う必要がある。たとえば次の如くである。

寛永頃の活版の『論語抄』[8]があり、著者は不明だが淸原家に傳えられたものである。そこに大分古い三善淸行の說がのっている。論語の「子欲居九夷、或曰陋如何、君子居之何陋之有」の「君子居之」を「君子之に居れば」と讀むものと「君子之に居れり」と讀むものと二通りある。近頃重野・根本兩博士は「君子之に居れり、何の陋かこれ有らん」と讀まれ、その說は三善淸行の說でこの抄に載っている。日本人の解釋としてはこう解釋するのも面白い一說で、果して三善淸行の讀みが正しいかどうかは別として、日本人の獨自の讀みがこうした抄ものに殘されていることは注目されなければならない。

「我が邦に於ける論語の實行と研究」は、大正六年、孔子祭典會における講演である。主意は時代によって論語の趣意の實行もまた研究も異る實狀を種々の逸話を雜えながら紹介し、古い時代に於ては論語の大體を知って直ちに實行して濟んでいたが、今日では知識も進歩して研究もせずに盲従せよというわけにはいかない。一方で精密な研究をし、一方で熱心な努力で之を實行にあらわすことが相伴って孔子の教え論語の趣旨も一般の人々に了解される、と說く。

林泰輔にとって、論語は『論語年譜』「論語に就て」において見られたように、いかに實際の政治や行政、近くは日常の生活の中に生かされ實行されていたかが大きな關心事であった。『論語』はただ古典として批判的に研究すればこと足りるものでは本來なかった。かれの信念であった。

五

古典講習科同期の親友は、市村瓚次郎、岡田正之、瀧川龜

太郎、西村天囚らで、瀧川・西村はそれぞれ仙臺、大阪に居住してともに會することは出來なかったが、市村・岡田・林の三人は「時に相會して切磋するを常とせり」(市村序)という。この五人の中で異色なのは西村天囚である。

天囚西村時彦は種子嶋の産。父の友人であった重野成齋を頼って上京。十九歳で古典講習科に入學し、先きの友人たちと會する。天囚はつとに文才を認められ周圍からは射鵰の才と將來を期待されるが、若氣の至りというべきか放蕩が過ぎて成齋からは破門され、奬學金も打ち切りとなって結局は中退。とこうするうちに下宿に籠って一氣呵成に書きあげた小説『屑屋の籠』が大ヒットし、若冠二十三歳の天囚の名は一時に廣まった。ひき續いて小説は書きつづけるのだが、遊びは止まない。債鬼に追われる日が續く。やがて都落ち。京都から大阪に移って朝日新聞社に入社。以後三十數年の記者生活。先きの學友四人の學者コースの歩みとは人生行路が全く異っていたのである。

天囚が重厚な人柄に變ったといわれるのは、明治三十三年から二年有餘の中國齧學を終えた頃からで、天囚もいまや不惑に近かった。天囚の關心も時事的な事から化政保弘期の歴史人物の發掘顯彰へと向っていった。土地の故老に聞き資料を蒐集しながら『柴野栗山』『學界之偉人』『九州巡禮』と書き連ね、やがて大作『日本宋學史』に結實する。すなわち經路こそ異れ、林泰輔と天囚とは、行きつくところまさに同臭の仲間であった。

「我が邦に於ける論語の實行と研究」で岡山の池田光政公の逸事を紹介し、こういう話もあるといって天囚に言及する一段がある。おおよそ次の如くである。

大阪朝日新聞の西村天囚は私の舊友でありますが、其處で見ましたが池田光政公が自分で大學中庸論語等の本文を寫したものがある。何の爲に寫したかというと、矢張り此池田家の同族であって因幡伯耆の國主である源光仲という人の家來に深田盛定という人があり、其人が非常に學問に熱心であるということを光政公が大變喜ばれて益々深田盛定の學問を奬勵してやろうという思召で、學庸と論語の本文を寫して深田盛定に賜わったということである。其書物の末には林道春、木下順庵ら三四人の人が跋文を書いて其由來がハッキリ分っているのであります。それが近來に至って何かの事情で逆に西村君に其書物を渡すということになったのであります。

こういうことから見ても池田光政公は自分も論語を尊重するし、又人にも其論語を寫してやるという程に論語を尊ばれ

たのである。

『論語』はただ單に研究の對象なのではないとする心情が、このほのぼのとした逸事を記錄させたのであろうし、年來『論語』に關心する林泰輔に、天囚が一つの情報としてこれを傳えたものであろう。

林泰輔の日常は、その夫人もいうように「その家に在るや、終日孳々として書を讀み筆を執るのみ」(岡田正之序)で、「生平佗の嗜好なし」ではあるが、「唯其の巨資を吝まずして購求するものは圖書なり、拓本なり、彝器なり、玉璧甲骨なり、悉く硏鑽の資にあらざるなし」であった。そこで「詩經詠ずる所の草木花卉は、容易に採集しがたきも、博士旁く捜り遠く討ねて、之を庭上に移植し、以て講詩の材となせり」(同上)と植物花卉に至るまで硏究熱心さは及んでいた。

はたせるかな『支那上代之硏究附錄』に「楷樹と蓍草」なる一文がある。楷樹は孔子の墳墓に弟子の子貢が植えたとの傳說を殘す名樹で、これを日本に移植したのは林學博士白澤保美氏であり、氏の說を傳えて楷は植物分類學上漆樹科に屬し、葉は奇數羽狀複葉で恰も「ハゼノキ」に似てやや小なり、という。

蓍草は占筮に用いるもので、古來から神草として尊重されてきた。しかしわが國にはこれと同じものはない。そこで昔の本草學者は「ハゴロモ草」「ノコギリ草」「鐵掃帚」あるいは「メド萩」といって諸說紛然として一定しない。そこで余は曲阜の聖廟に詣でし折り蓍草の新苗をもち歸って庭に植え、繁茂した。これを見ると正しく說文の蒿の屬の菊科に屬する多年生草木で、「ハゴロモ草」「ノコギリ草」とは全然同じからず、古人紛々の論之を以て一掃すべし、と結論する。

『千葉縣圖書館史』は、林泰輔の項で林の畧歷を述べたあと、次の文を載せている。

當時東京師範學校の教授であった兒嶋獻吉郎のいうには、林泰輔は古い經學者の型そのままを保有している珍しい學者で、今の漢學者は皆現代風に感化されているが、彼は全然昔風の型だ。本を廣く讀んでいることは恐らく現代隨一で、博士にはとっくになるべき人であったが、その方面にはいたって無頓着で、六十に近い今まで何事も顧みず、ただ讀書に沒頭していたのだろう。先年から庭いじりを始めたが、それが所謂園藝とは異って、庭の一木一草皆詩經にあるものを植え込み、卽ち彼の庭は經學の庭なのである……。(9)

この經學の庭から生まれた實證的な小論文が、さきの「楷樹と蓍草」である。

六

明治三十年代の後半から人々の意識は、從來の歐米一邊倒から次第にわが國の自然や文化の獨自性、ひいてはその價値の發見へと大きく方向を轉じていった。漢學の分野でいえば、內藤湖南の『關西文運論』や井上哲次郎の『日本陽明學派之哲學』をはじめとする漢學三部作などその例といえよう。明治の初中期にさながら陳腐の代名詞の如く扱われた漢學の世界もようやくこの期に至って平靜に同顧され研究される狀況に立ち戻った。

社會のこうした趨勢の中で明治の末年服部宇之吉を總編輯とする『漢文大系』全二十二卷が刋行された。この叢書は、中國古典をひとわたり原文で紹介し、しかも注釋はすでに評價の定まった古典的なもの、及び中國の最新の硏究、たとえば近人王先謙の『荀子集解』、孫詒讓の『墨子閒詁』、かつ邦人の秀れた注解、たとえば安井息軒『管子纂詁』太田方『韓非子翼毳』の採用といった大膽な企畫であった。この試みは江湖に大好評をえて版を重ねることとなった。同じころ早稻田大學出版部では口語譯による邦人の名著の刋行を企畫した。「先哲遺著」と銘うっての『漢籍國字解全書』全四十五冊の刋行である。これも大成功であった[10]。

つまり林泰輔にせよ、西村天囚にせよこうした世上一般の動向と無關係に日本漢學に關心していったわけではない。ただかれらは、從來の硏究が基礎的であり、なお概括的な段階に止まっているのに對して、林は論語に焦點を合わせ、天囚は宋學の傳來に力點を置いて、特殊個別的な專門硏究へと一步を進めていった。林泰輔の場合、未完の憾みこそ殘るが、『論語年譜』及び林文庫の貴重書類は、次なる日本漢學硏究にとって貴重な遺產であり、また鈔ものの重要性を示唆するところ貢獻きわめて大といわねばならない。

そして忘るべからざることは、林泰輔の終始世の中に關わりつづけようとする姿勢である。若くして杜城文庫を開設して鄉里の子弟敎育に盡悴し、『論語年譜』を作成しては「史實」の項を設け、論語がいかに社會に生かされたかを記錄する。硏究と實行とは、そのままで相卽するとはいえないまでも、全然別ものであってはならないのである。

沒後、林泰輔の厖大な藏書は、公共の圖書館や硏究機關に寄贈されるが、これも硏究者でありつつ同時に世の中と不斷に關わりつづけようとする信念からであったに違いない。

註

(1)『支那上代之研究』（昭和二年 進光社）序
(2)同右
(3)『千葉縣圖書館史』（中央圖書館發行）杜城圖書館の項
(4)この項髙木三男「林文庫」（「つくばね」一九八二、八―二）のご教示による。
(5)同右
(6)『論語年譜』四八〇頁
(7)同右　四五六頁
(8)この書は、前出の元和古活字本を指している。
(9)兒嶋獻吉郎は、古典講習科の第二回卒業生。この文章がもともとどこに發表されたのかは不明。書かれた時期は、恐らく大正三年、林泰輔が「上代漢字の研究」で博士號を授與されたころであろう。
(10)『漢文大系』については、拙稿『漢文大系について』（九州大學文化史紀要34輯）、『漢籍國字解』については、同じく『漢籍國字解全書について』（東洋の思想と宗教第九號）を參照されたい。
(11)林泰輔の遺書を所藏するものは、
(A)千葉縣立中央圖書館
(B)筑波大學中央圖書館
(C)慶應義塾大學斯道文庫
(D)東洋文庫
等である。

付記　本稿を草するに當って、大東文化大學教授內山知也氏、筑波大學教授堀池信夫氏、筑波大學中央圖書館、千葉縣立中央圖書館の皆さんにお世話になった。記して謝意を表します。